

令和 6 年 6 月 1 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02611

研究課題名（和文）プルーストのテキストにおける引用

研究課題名（英文）References in Proust's works

研究代表者

松原 陽子（Matsubara, Yoko）

明治大学・商学部・専任教授

研究者番号：10610371

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：プルーストの作品における引用について研究を進め、他の作家の作品との関連を明らかにした。他方、村上春樹の小説にプルーストがどのように取り込まれたのかという問題を分析した。研究成果として発表した論文においては、プルーストの小説『失われた時を求めて』におけるイメージをたどり、その変遷が作品の結構とどのように結びついているのか分析することに重点を置いた。その際、作品の執筆過程における変更点を確認し、変更の理由を探った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

プルーストと他の作家の関連を考察することで、プルーストの手法が持つ独自性を浮かび上がらせることができた。フランスの作家だけでなく、日本の作家との比較の視点を導入し、新たな視座からの考察が可能になった。また、『失われた時を求めて』の草稿から最終稿に至るまでの変更点を確認し、執筆過程を含め作品中のイメージをたどることで、プルーストが他の作家の影響を受けながら、独自のイメージを創り出していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research studies references to other writers in Proust's works, especially in his novel "In Search of Lost Time". References to Proust in works of Haruki Murakami were also analyzed. My research papers focus on the change of images Proust's works including the drafts of the novel "In Search of Lost Time".

研究分野：人文科学

キーワード：プルースト 生成過程 演劇 イメージ 村上春樹 フローベール ボードレール

#### 1. 研究開始当初の背景

プーレストはその作品中で頻繁に他の作家の作品を引用している。特定の主題について、プーレストの手法と他の作家、特に同時代の作家の手法を比較するという視点により、新たな分析が可能であると考えた。また、プーレストの作品におけるイメージの変遷をたどりながら、草稿から最終稿に至る過程でどのような変更が加えられたかを考察することで、綿密な分析が可能になると考えた。

#### 2. 研究の目的

プーレストと他の作家の作品を比較、分析することで、プーレストの手法の特異性を指摘することを目的とした。この課題を進めるため、プーレストの小説『失われた時を求めて』の執筆過程と文化的背景を調べながら、複数の文学作品と比較した。世紀の転換期に批評や文学作品が変化していく中、プーレストがいかに同時代の知と歩みを共にし、そこから新しい手法、そして作品を生み出していったのかを明らかにすることを目指した。

#### 3. 研究の方法

プーレストのテキストに取り込まれた文学作品の分析をするいっぽうで、プーレスト以外の作家が小説に取り込んだプーレストの手法を分析した。同時にプーレストと他の作家の手法を比較した。また、プーレストの小説の執筆課程をたどり、書簡や文芸批評の調査をおこなった。

#### 4. 研究成果

プーレストのテキスト、特に小説『失われた時を求めて』における引用、そしてこの小説の草稿について、研究期間を通して、資料調査を進めた。毎年、論文を公表しながら、書簡や批評、草稿の解説を進めた。プーレストや他の作家、批評家が明示的、暗示的に引用の対象とした文学テキストを分析することから始めた。プーレストの作品の執筆過程を追い、小説の主題と変化するイメージとの関係を明らかにするために、研究を進めた。また、プーレストと近い時代の作家を比較することで、19世紀から20世紀にかけての小説がどのように変化していったかを探ることを目指した。

他方、プーレスト的手法を取り込んだ作家の独自性を浮かび上がらせようと試みた。この試みは、プーレストの作品、なかでも『失われた時を求めて』が後の作品においてどのように受容されたのかを考察することにもつながる。

下記で、公表した研究成果について具体的に記す。

(1) まず、小説だけでなく、書簡や批評、草稿を含めた資料の解説を進め、プーレストが明示的に引用の対象としたテキストを分析した。プーレストのテキストにおいて、ラシーヌの劇はフランス17世紀文学のうちでも特に頻繁に引用され、重要な役割を果たしている。そこで、論文(査読有り)「ラ・ベルマの『フェードル』 別離の苦悩とラシーヌの詩句」で、本論文執筆当時、刊行されて間もなかったプーレストの草稿カイエ67の転写版を解説し、草稿を含めプーレストの小説『失われた時を求めて』においてラシーヌの引用がどのような役割を持つのか明らかにした。

この論文では、『失われた時を求めて』の生成過程をたどりながら、『花咲く乙女たちのかげに』と『ゲルマンのほう』におけるラシーヌの引用を分析した。プーレストの小説『失われた時を求めて』において、語り手の「私」はラシーヌの『フェードル』を観劇する前に、フェードルの告白の台詞を唱える。ところが、この小説の草稿の該当箇所では引用されていたのは別の場面の台詞で、その台詞は最終稿で他の箇所に移されている。以上の変更がなされた理由を考察することで、『フェードル』からの引用と『失われた時を求めて』の主要テーマとの関連を明らかにすることができた。フェードル役を演じるラ・ベルマの演技に関する登場人物による批評について、その生成過程を調べることで、登場人物像を浮かび上がらせた。

(2) 論文(査読有り)「『失われた時を求めて』における舞台芸術：小劇場の演者」では、プーレストの小説で描かれる舞台芸術のなかでも、特に演劇を分析した。この論文を執筆する上でも、刊行されて間もないプーレストの草稿カイエ67の転写版を参照した。観劇の描写においては、舞台芸術をめぐる問いと答えが暗示されている。ラシーヌの『フェードル』で主役を演じる女優ラ・ベルマの演技、無名の役者たちが演じる小劇場の芝居、そして芝居が終わった後で練習するダンサーの描写に着目し、草稿から最終稿に至るまでに、物語の設定や登場人物をめぐる色彩がなぜ変更されたのかを考察した。それにより、プーレストの小説において、舞台芸術とはいかなるものが、草稿と最終稿で用いられる色彩が小説の主題や構造とどのように結びつけられているのか明らかにすることができた。

(3) 論文(査読有り)「『失われた時を求めて』におけるイメージと色彩：登場人物の瞳と背景

をめぐって」により研究成果を発表した。『失われた時を求めて』の生成過程において、登場人物間の描写が入れ替わることがある。イメージや色彩がなぜ登場人物間で交換されたのか、その理由を考察することで、プルーストの小説において複数の登場人物をめぐるイメージと色彩が小説のモチーフとどのような関連を持つのか分析した。アルベルチヌを中心として、ゲルマント公爵夫人、ジルベルト、サン＝ルーの瞳と背景のイメージをたどった。

(4) 「『失われた時を求めて』におけるゲルマント公爵夫人」(図書掲載論文)においては、プルーストの草稿や『失われた時を求めて』におけるゲルマント公爵夫人のイメージの変遷が物語の展開とどのような関係を持つのか考察した。先行する作品ではゲルマント公爵夫人の前身となると考えられる登場人物が現れる。そこで、その登場人物とゲルマント公爵夫人を比較、分析した。

(5) 国際シンポジウム「プルーストと受容の美学」(大阪大学開催)で、「イポリットの死と絵画『カルクチュイ港』」という題で発表(フランス語)をおこなった。この発表では、『花咲く乙女たちのかけに』における絵画『カルクチュイ港』の描写文で展開される比喩が、イポリットをめぐる文学テキストで用いられていることを指摘した。そして、この比喩が小説でどのような役割を果たしているか分析した。

(6) 論文「『失われた時を求めて』におけるステルマリアのイメージ ステルマリア嬢からステルマリア夫人へ」(査読有り)において、ステルマリアのイメージがプルーストの小説の展開やモチーフとどのように結びつけられるか考察した。草稿でも、ステルマリア嬢の前身となる複数の登場人物、コデラン嬢、カンペルレ嬢、ペノエ嬢、シラリア嬢をめぐる描写を追った。ステルマリア嬢、そしてステルマリア夫人は、プルターニュの風景、そして、プルターニュの海の水のイメージに結びつけられる。また、フローベールの『プルターニュ紀行』における色彩が、ステルマリア嬢、そしてステルマリア夫人をめぐる描写において用いられていることを示した。

(7) 論文「『失われた時を求めて』におけるオデットのイメージ オデットからスワン夫人へ」(査読有り)では、プルーストの小説におけるオデットをめぐるイメージの変化を分析し、その変化が小説のモチーフといかなる関係を持つのか分析した。『失われた時を求めて』の草稿から最終稿をたどっていくことで、彼女が絵画や花、水のイメージに結びつけられることを示した。オデットは、ギュスターヴ・モローが描いた絵画の登場人物だけでなく、フローベールの作品の登場人物をもとに描かれている。文体の面でも、オデットの描写で用いられている文体はフローベールの『サランポー』の文体に影響を受けており、『花咲く乙女たちのかけに』の終りで、語り手「私」の回想とともに、藤棚も最後の文章の末尾に置かれている。このような文体の効果についても考察した。

(8) 論文「プルーストの作品におけるイメージと色彩 鳥、魚、宝石のイメージ」(査読有り)では、『失われた時を求めて』における鳥や魚、宝石のイメージがフローベールの作品をもとにつくられていることを明らかにした。フローベールの作品で見出せる鳥と魚の描写がプルーストの作品の登場人物の描写に取り込まれていることを示すことから始めた。先行研究によると、『聖アントワーヌの誘惑』における鳥のイメージは、サン＝ルーの描写に取り込まれている。本稿では、鳥の描写のなかでもサン＝ルーの描写に取り込まれていない特徴にも着目し、そうした特徴がゲルマント公爵夫人の描写に取り込まれていることを明らかにした。また、サン＝ルーに魚の比喩が用いられることはないのに対して、『サランポー』における魚の描写がゲルマント公爵夫人のイメージに重ねられていることを示した。語り手「私」の恋の対象であったゲルマント公爵夫人は白い鳥のイメージに結びつけられていたが、老いてからは、魚に喩えられることになる。

次いで、フローベールとプルーストの小説で、宝石とクジャクの羽根のイメージが現れることを示した。とりわけ、フローベールの『聖アントワーヌ』で描かれるクジャクの色彩は、『失われた時を求めて』に取り込まれ、無意志的記憶に結びつけられる色となっている。『見出された時』においては、無意志的記憶によって、バルベックの海景が甦り、海の緑色と青色とクジャクの尾羽の色が重ねられる。思い出される海の色はエメラルドやトパーズの色に擬えられる。宝石類とクジャクの尾羽の色は無意志的記憶によって甦る海の色に重なるのだ。以上のように、作品の主題とイメージ、色彩の関係を考察した。

(9) 論文「プルーストの作品におけるステンドグラスのイメージ 幻灯からステンドグラスへ」(査読有り)では、草稿を含めプルーストの作品における幻灯とステンドグラスの描写をたどり、そのイメージが小説の主題といかなる関連があるのか考察した。まずは『失われた時を求めて』の草稿とこの小説に先行する『ジャン・サントウイユ』における幻灯の場面を分析することから始めた。先行研究が示しているように、『失われた時を求めて』の幻灯の場面におけるゴロの騎行は、『ジュヌヴィエーヴ・ド・ブラバン』では描かれておらず、プルーストによる創作である。『失われた時を求めて』の草稿で幻灯はステンドグラスの比喩によって描かれており、コンプレーの教会のステンドグラスの描写に使われる表現は『聖ジュリアン伝』でも用いられて

いることが指摘されている。『失われた時を求めて』における幻灯の場面で描かれるゴロの騎行の描写はフローベールの『聖ジュリアン伝』における登場人物の騎行の場面をもとに描かれたものであると考えられる。

(10) 論文「『失われた時を求めて』における太陽のイメージ 窓越しに見える光景」では、草稿を含めて、『失われた時を求めて』において、太陽のイメージが小説の結構やモチーフとどのように結びつけられているのか分析した。太陽のイメージとともに現れるカフェオレ売りの娘のイメージをたどったところ、太陽の色彩がこの登場人物や空、教会の描写をつないでいることがわかった。また、ボードレールの詩「夕べの諧調」の一節とフローベールの『聖アントワーヌ』の描写は、プルーストの『ソドムとゴモラ』における太陽の描写のもとになっている。先行研究が指摘するように、カフェオレ売りの娘が登場する『花咲く乙女たちのかげに』におけるバルベック旅行の描写の草稿カイエ 32 における朝日の描写は、『ソドムとゴモラ』の「夜明けの悲しみ」の描写に転用されている。カフェオレ売りの娘が現れる場面で描かれる朝日のイメージが幸福と結びつけられるのに対して、『ソドムとゴモラ』における朝日が結び付けられるのは、語り手「私」の恋愛の苦悩である。このようにプルーストの小説における太陽のイメージは両義的なものであることを指摘した。

(11) 論文「村上春樹と『失われた時を求めて』 海と船のイメージをめぐって」においては、村上春樹の小説と『失われた時を求めて』を比較し、それぞれの小説で海と船のイメージが現れる場面を分析した。それにより、両者の手法の共通点と相違点を指摘した。具体的には、主人公が眠っているヒロインを見つめる場面を中心として、村上春樹の『海辺のカフカ』、『アフターダーク』と『失われた時を求めて』を比較、分析した。『失われた時を求めて』においても、村上春樹の作品においても共通する小説の手法が確認できたというわけで、両者の独自性を浮かび上がらせることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 松原陽子	4. 巻 574
2. 論文標題 村上春樹と『失われた時を求めて』 海と船のイメージをめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 91-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松原陽子	4. 巻 571
2. 論文標題 『失われた時を求めて』における太陽のイメージ 窓越しに見える光景	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松原陽子	4. 巻 68
2. 論文標題 ブルーストの作品におけるステンドグラスのイメージ 幻灯からステンドグラスへ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要 第68輯	6. 最初と最後の頁 239-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松原陽子	4. 巻 40
2. 論文標題 『失われた時を求めて』におけるオデットのイメージ オデットからスワン夫人へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ステラ	6. 最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4752560	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松原陽子	4. 巻 67
2. 論文標題 ブルーストの作品におけるイメージと色彩 鳥、魚、宝石のイメージ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要 第67輯	6. 最初と最後の頁 223-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松原陽子	4. 巻 39
2. 論文標題 『失われた時を求めて』におけるステルマリアのイメージ ステルマリア嬢からステルマリア夫人へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Stella	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/4355448	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松原陽子	4. 巻 38
2. 論文標題 『失われた時を求めて』におけるイメージと色彩：登場人物の瞳と背景をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Stella	6. 最初と最後の頁 59-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/2556273	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松原陽子	4. 巻 37
2. 論文標題 『失われた時を求めて』における舞台芸術：小劇場の演者	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Stella	6. 最初と最後の頁 213-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/2203055	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松原陽子	4. 巻 36
2. 論文標題 ラ・ベルマの『フェードル』 別離の苦悩とラシーヌの詩句	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Stella	6. 最初と最後の頁 135-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/1906132	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 松原陽子
2. 発表標題 La fin d'Hippolyte et le Port de Carquethuit
3. 学会等名 PROUST ET L'ESTHETIQUE DE LA RECEPTION (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 共著(松原陽子)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝日出版社	5. 総ページ数 12
3. 書名 Correspondances (コレスポンドランス) : 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------